からするともう一杯一杯の運営といえるでしょう。結局、この低い数字には産婦人科病棟の閉鎖など稼働していない診療科の影響が反映されています。

坂本　そうですか。

木下　新築移転に伴って、脳外科、泌尿器科など新診療科の開設を見越してベットの増床などを行ったのですが、スタッフの確保や体制整備が十分なものとできなかったという反省もあります。

冒頭に当院に限らず全国的な医師不足という深刻な問題が提起されたのですが、それはどのような状況で招かれたのでしょうか？

医師不足の要因は過酷な労働条件

坂本　現在のめざましい発展をとげた日本の医療技術を支えているのは大学病院の医師だけでなく、地域の基幹病院の勤務医といえるでしょう。大学側は医師の実地修練を目的として多くの関連病院をもっているわけですが、勤務医の中には過酷な労働条件を避け、時間の制約の少ない開業医や研究者などの道に進む人が次第に多くなってきています。

また最近では女性医師の占める比率が高くなり、就業したくても出産・育児・家事などをしながらの過酷な労働条件では就業することができない人も増えているのが要因と思われます。

高元　我々の時代の医師には医師になろうとするモチベーションがありましたよね。医師になって難しい病気の患者を救ったという喜びは大きかったですよ。でも今の医学生は医師としての適性より優等生の集団として存在しているのかもしれません。

それにメディアでは時給100万円の美容外科とか、魔法の手をもった心臓外科とか、まるでカリスマ医師のように持ち上げる風潮は医療をおかしくしています。彼らにはタレント性はあるかもしれないけど、日本の医療技術を支えているというのはウソですよね。本当に能力のある医師はいたって真面目で地味です。

市民の期待する病院は

気軽に利用できる病院 病院理解にギャップ

―市民の皆さんは、市立病院になにを期待していると思われますか。

木下　私に最近届いたEメールは市民の方が望んでいる一つの典型的なご意見かもしれませんのでご紹介しましょう。

> **市長へのEメールから**
> 「…私達の税金で、立派な病院を建てて頂いたのは有り難いのですが、気軽に利用できないなんて、意味ないですよね（かかりつけ医からの紹介状が必要だから。文化会館とか図書館は気軽に利用できるのに。なんで、一番身近で、一番大切な健康を維持できる病院がこんななのかって思うと、ガッカリです。」
> （草加市・40代・女性）

高元　病院では定期的に外来と入院の患者さんにアンケートによる満足度調査を実施していますが、ご不満の回答はほとんど外来の患者さんからです。待ち時間、言葉遣い、医師の説明や態度などですが、軽症の患者さんが大半です。一方、入院されていた患者さんは、突然の下血や心臓発作から救われたという方で、おおむね満足のお気持ちを持っておられ、大きなトラブルは発生しておりません。ですから外来患者さんと入院患者さんとの間には市立病院の価値を理解する点でいくらかギャップがあるといえるでしょう。

坂本　東京もそうですが一般に若い人ほど大病院＝ブランド志向ですね。それに若い人は普段健康な分だけ病院の事情を知りません。逆に年配の方は病院には通い慣れていたり、高血圧などで長期通院の方も多いので、自宅から通院しやすい開業医に行くのです。大学病院は高度先端医療などを提供しているのですが、病院の事情を知らない結構無責任な投書はこちらにも沢山きます。

木下　苦情がきたら真摯に受け止めるべきですが、病院の本来の役割や医療現場の実情まで市民の皆さんに理解していただくのは難しいところです。

高元　僕らが医者になった頃の苦情は、「癌が治らなくて残念だ。」などの治療内容についてのリクエストが多かったのですが、今はちょっとした言葉のやりとりなど人間関係のトラブルで、患者さん自身がビリビリしていて、昔のようなお互いに信頼できる人間関係が作れないのは残念なことです。

坂本　その通りですよね。

病院の本来の使命は高度な医療の提供

市長　高元病院長からみて、23万市民の満足度はどこに向けられているとお考えですか。

高元　私たちの病院の本来の使命は、癌や心臓病、脳血管障害などの患者さんを受け入れて治療する病院です。

もちろんこれらの病気の発症を予防する糖尿病などの治療も軽視はしませんが、病院でなければできない高度医療にどうしても比重が傾くと思います。患者さんには〝癌が治った、脳卒中から一命を取り止めた〟と感謝される病院を目指したいと思っています。

でも市民の方にとっては、どんな病気でもいつでも快く診てくれるという使い勝手の良い病院、身近な病院なのかもしれません。

坂本　確かになんでもかんでも患者さんの希望を無限に受け入れていくということには限界があります。また、そうなると本来の病院長になっての第一原則ですが、「傷つき病気になってくる人を拒むな」という姿勢と、患者さんとの人間関係ではごく標準的なマナーそして身だしなみを身につけるよう教育しています。スリッパやジーパンなどでの診療は禁止です。また医療訴訟も現実的には多いことから、医学生に医療裁判の見学などを義務づけていますし、また逆に大学病院で裁判官の研修も受け入れています。医療現場を知らずに裁判をしていいものかと、全国から検事補や判事補の方が研修に来ています。そうして研修を終えて帰る時に、検事たちの眼が変わってきているのがわかります。

市立病院の今後は

広域での医療分担と特色ある病院づくり

―市立病院は今後、どのような方向に進んだらいいと思いますか。

坂本　草加市に限らず、これからは広域で医療を分担するという観点が必要でしょうね。ですから全ての診療科が揃っていて何でもかんでも引き受けますというのではなく特色をもった病院づくり、そして、それらの病院間の連携が望まれるでしょう。

高元　立脚している地域の中で市立病院でなければできない診療、地域性のあるレベルの高い診療を目指すようにというアドバイスですね。

坂本　そういっても地域の医療を考える上で、それぞれの地域に大学病院にかわる中心的医療機関が必要です。時に心筋梗塞や脳出血を起こし都内の大学病院まで運ぶ時間がなく死んでしまう危険性だってあるのです。それを考えたら市立病院を維持することが市民にとって得策である事が分かるはずでしょう。また大学はそうした患者を扱えるし医師を派遣しているのです。市立病院の資質や実力などをアピールし、開業医の先生方にはできることをしてもらう。1年、2年、5年経って病院で何人の救急患者を助けているか、心筋梗塞や脳出血を何人助けているかということを広く市民に理解してもらえればいいと考えます。

木下　私も含めて、市民の皆さんからみれば病院の実態は分かりにくいですね。

高元　そこで今、病院で起こっている事や医療に関する情報などをお伝えするため、ホームページのリニューアルや「市立病院だより」の発行、また、このような紙面も作っています。市民の皆さんに病院の方針とその実態などへの理解を深めていただきたいと思っています。

病院運営は公共性と健全性の追求

―市立病院の運営には多額の税金が使われていると聞いています。経営面での状況についてお聞かせください。

高元　市立病院の決算が多額の赤字だと報告されています。しかし、その内容をみますとこれだけ立派な施設と医療設備を備えて頂いたわけですから、その減価償却費だけでも年間約10億円が含まれているわけです。住宅を新築されてもすぐに家計の採算はとれないのと同じです。市立病院は基本的には営利第一の病院ではありません。ですから長い目で見て欲しいと思います。実際に現在のスタッフで得られている医業収益は決して他の公立病院に劣らないものです。いやそれどころか、よく奮闘していると思います。

木下　市立病院は市民サービスという観点から、条例で個室料金など差額部分もできるだけ低い水準に抑えています。また、時には利益の見込めない医療も引き受けなければならないし、それに対する負担は市としてもやっていかなければならないと考えています。

坂本　市立病院が市民の求める医療の中で質的レベルの高い部分を担いつつ活動していくのはあたりまえです。そのための税負担も必要でしょう。負担無くしてサービスは成立しません。その上で、安全な医療を提供するというのが一番重要なことでしょう。

―最後に、高元病院長、病院事業管理者として病院運営についての抱負をお聞かせください。

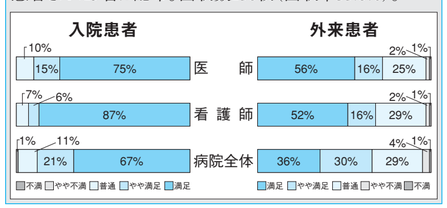
高元　病院のよりよい運営には超えなければならないハードルが沢山あります。でも一番大切なのは我々職員が病院の発展のために頑張ろうと気持ちを一つにして進むことかもしれません。病院が発展していけばそれは同時に病院の健全経営につながります。市民の方々に喜んで頂けるような中核的レベルを維持できる病院を数年以内に造れるよう精一杯邁進するつもりです。市民の皆さん、市長さん、また坂本病院長に今後も変わらぬご支援をお願い致します。

―長時間にわたり、大変、貴重なご意見ありがとうございました。

患者さん満足度アンケート調査結果

外来：平成18年7月10日から15日の間に外来診療された患者さん4,133名に配布。回収数917枚（回収率22.2%）。

入院：平成18年7月10日から8月9日の間に退院決定された患者さん429名に配布。回収数230枚（回収率53.6%）。



地域医療連携で市民の皆さんのいのちと健康をお守りします

草加市立病院と地域医療連携

草加八潮医師会長　内山　泰宏

草加市の皆様が病気や健康管理について安心して相談できるために草加八潮医師会は草加市立病院と常に医学の研鑽に努めております。ご存知のように草加市立病院は草加八潮地域における唯一の中核病院であります。当医師会は現在125の病院及び診療所の医師が会員になっておりまして、市民の皆様の医療、保健及び福祉に係わっています。最近の医療は技術の著しい進歩によりまして専門化されております。このため病院と診療所が互いに連携をしてお一人の患者さんに対処しなければなりません。そのために医師が信頼して紹介できる頼もしい病院、それが草加市立病院と考えておりますので、私ども会員医師の願いに応えていただけるものと期待しております。

医療連携で歯科保健の向上を目指します

草加歯科医師会長　藤波　齊

草加歯科医師会は、市内の歯科医師85名で組織する団体です。各歯科医院ではかかりつけ歯科医として、歯科診療はもとより歯科検診や相談、予防処置などを行っております。

歯科といっても、近年は様々な分野に分類されつつあり、歯科口腔外科は口の中を専門領域とする外科的なもので、各歯科医院では十分に対応できない分野です。新病院では歯科口腔外科が新設され、口腔の炎症や外傷、顎関節症、腫瘍、先天性疾患など口腔外科領域の二次・三次医療の提供をしていただいております。地域の歯科医院療にとりましてたいへん心強いかぎりです。

今後も、市立病院との連携を密にしながら、市民の皆さんの歯科保健の向上を目指してまいりたいと存じます。

医薬分業でお薬を安全に

草加市薬剤師会長　杉山　義夫

平成13年からの医薬分業に伴い、「よりよい地域医療環境」を整備するために、薬剤師会と市立病院は協力し連携を進めてまいりました。

各薬局では医師の処方箋をもとに調剤し、患者さんの体質や、以前処方された薬の内容などの記録（薬歴）を保管するので、薬の飲み合わせなどによる副作用を防ぐことができます。また薬の説明や服薬指導など、薬の安全性の確保に努めています。薬剤師会では「かかりつけ薬局」を持つことを推奨するとともに、勉強会などを行い薬について情報の共有を図っています。

市立病院の「ファックスコーナー」では、処方箋を「かかりつけ薬局」に送付していますが、患者さんからご好評をいただいております。

診療科ご紹介

小児科

副院長　土屋　史郎

現在、小児科は私を含め5人の常勤医師と1人の非常勤医師で午前中の一般外来、午後の専門外来「腎臓・神経・心臓・アレルギー・乳児健診・予防接種」、入院診療、24時間365日の小児科救急を行っています。心の問題に対しては臨床心理士が心理カウンセリングも行っています。何か子供の健康について困ったことがあれば、ご相談ください。

また当院小児科では、市民の皆さんに子供の健康について知っていただこうと、「こども健康教室」を始めました。1回目は平成18年6月に「意欲ある子の育て方」、2回目は平成18年12月に「こどもの急性疾患」と題して行いました。今後も続けていく予定ですので、ご参加をお待ちしております。

子供の急病については、小児科学会がインターネット上で作成した「こどもの救急」http://kodomo-qq.jp/が参考になると思いますのでご利用ください。

脳神経外科

脳神経外科部長　新井　俊成

平成16年7月に草加市立病院新病棟開設に当たりまして、脳神経外科が新たに加わりました。私を含め3名は、地域医療の充実に向け、励んでおります。

当科の扱う疾患は、主に救急疾患としては脳血管障害（脳出血、脳梗塞、クモ膜下出血、頭部外傷、そして慢性疾患としては脳腫瘍などがあります。脳腫瘍症例に対しては、コンピューターによるナビゲーションシステムにより、最大の腫瘍摘出と最小の術後の後遺障害で、非常に良好な成績を上げています。

しかし二次救急病院である当院の性格上、やはり救急疾患が主で、昨年度手術の内72%が緊急手術でした。しかし手術に限らず、二次、三次救急（入院治療が必要な重症患者）に対しては昼夜を問わず常に対応できるよう体制を組んでいます。手足の麻痺や意識障害が突然起こったときには、周りの人はすぐに来院させてください。

～オレンジ色のエプロンで患者さんをサポート～ 院内ボランティア・マーガレット

病院を訪れたとき、オレンジ色のエプロンを着けた方々を見かけたことはありませんか？

初めての患者さんでも診療や会計などの手続きがスムーズにできるようにと、案内業務のお手伝いをいただいている病院ボランティア・マーガレットの皆さんです。メンバーは60歳代の女性が中心で現在57人、週1回程度のペースで活動されています。

主たる活動は、案内業務のほか、車椅子で来院する方のサポート、各種申込書の記入補助、再来受付機や自動支払機の取扱い説明などです。このほか、小児病棟での読み聞かせ、コンサートの開催、季節の壁飾りや生花の展示なども行っています。ボランティア活動をしている西尾正道さん（北谷在住・69歳）は、「いつも笑顔で接することに心掛け、患者さんや家族の方が少しでも心和むように努めています」と話してくれました。